

「自分発」を耕せ!!

財団法人児童館連合会事務局次長 勝俣 慶信

春。花は一斉にほころび、小鳥たちのさえずりも楽しく、新しい命が天にも地にも躍動する。畑や田んぼも冬の眠りから覚め、春の光りと空気を十分に土の中に取り込む季節である。子どもも、それぞれに新しい生活が始まる。さて、児童館も気分一新！地域を耕してみてもいいかだろうか。

▼耕す「見えてくる」

本会の主催する中堅児童厚生員研修会で、地域の実態調査活動を行っている。調査といっても、一日街の中を歩いて、子どもの遊ぶ姿や集まっている場所を見て回ったり、子育て中の母親の集まる公園へ出かけて直撃インタビューを行い、生の声を収集しようというものだ。今年度は各地で、主任児童委員・民生児童委員の方々の協力を得て実施した。

そこで見えてきたのは、第一に、地域には子どもが選んだ人や子どもが選んだ場所があり、そこは「もう一つの児童館」の機能を果たしているという事である。第二に、地域には必ず、子どもが気になって、子どものための活動を自

然体で行っている人がいるという事である。その人は「もう一人の児童厚生員」である。駄菓子屋さんのおばあちゃんが隣の先生であったり、元大工のおじいちゃんが工作を活かした遊び場を作っていたり、シルバー人材センターから週に二日、小学校の焼却炉の仕事に派遣されているおじいちゃんが、かくれたスクールカウンセラーであったり、「俺は子どものことが気になってしょうがねえんだ」と言いながら、夜、高校生の相手をしているお好み焼き屋のお父さんにも出会った。また、主任児童委員さん自身が人形劇サークルを主宰されており、ご自宅がもう一つの児童館的機能を果たしている例も見つかった。地域を耕せば、素晴らしい人材に出会えるのである。

▼「自分発」を支援する

福祉教育研究会主宰の木原孝久氏は「ふくし（セルフヘルプ）」の第二步を「自分発」と呼ぶ。自分の今に気づき、よりよい生活への第一歩を踏み出す（発信する）という意味である。先の「ピーンズ」や「とぼす」の例に見られる

ように、住民活動の原動力は「やってみよう」という自分発である。児童館の福祉機能もまさに「自分発」を支援することと言えよう。安心感、充実感のある生活づくりを口指すことは、自主性、自発性を引き出し、人間関係を豊かにし、自立へと向かわせる。その経験の積み重ねの中で、自己の確立がはかられていくのである。今、受け身の状態に置かれている子どもに、自分発の機会をどれだけ保障し、支援することができるかが重要である。そう考えると今は、新年度の児童館活動計画に、「子ども発」を盛り込むチャンスといえよう。

▼中学生・高校生にもニーズはある

児童館は小学生まで。これが一般的なイメージである。けれども、もし児童館が使いやすければ、中学生や高校生にも利用ニーズはあるはずである。

そこで、特に、小学校を卒業する6年生を中心に声掛けし、中学生の組織づくりを図ってみよう。進学をお祝いする会などを開き、今までの活動をふり返りつつ、今後どのような活動を



していきたいかを一緒に話し合うことから始めてみる。そこから彼らの生の声（ニーズ）が引き出せる。また、児童館は実はこのような役割をもっており、どのような活動をしていきたいかなど職員側から伝えることで、子どもにとっても小学生の時までとは違う大人の雰囲気を感じることもだろう。また、中学生になった自分たちは期待される存在であることを伝えたい。今、地域社会から期待される経験が極めて乏しく、地域での居場所がないのである。彼ら自身の自由感や自発性を大切に育て、「自分発」の力を養い、児童館活動を通して自分を見つめ、発見していく歩みを共にしたいものである。

＜中・高校生活動のアイデア＞

- (1) 自主活動（バンド等）に場を提供
- (2) 中・高校生プログラム企画委員会
- (3) 中・高校生タイムの導入（曜日と時間を決めて、中高生の優先利用）
- (4) 中・高校生だけの特別プログラム
- (5) クラブ活動や教室活動の指導者役

- (6) 児童館のサブスタッフとして委嘱
- (7) 職員と混合のバンドや劇団編成
- (8) 自分の特技で児童館プログラムを盛り上げる、特技ボランティア
- (9) 英語の苦手な子の会など
- (10) 「いじめ」などの当事者グループ
- (11) 彼らの活躍の場を地域へ拡大

▼街のニーズを吸収する

さて、先の「とぼす」には地域の様々なニーズが自然体で集まってくる。オーナーの白根さんはそのニーズをスポンジのように吸収し、喫茶店を活用して人々が真に憩うコミュニティの場づくりを楽しんでいる。喫茶店が目的ではなくコミュニティづくりが目的であるため何でもOK。とにかくニーズに敏感なのである。「とぼす」に集う人々はそれぞれのニーズを抱えてやって来る。しかしそこで休憩しまた活動に参加していく中で、人と人との関わりが拡がり自分発見にも繋がっているであろう。そこにはよりよい生活を求めて集う人々の幾つものセルフグループがあり、白根さん自身が楽しみながらそれらをコーディネートしているのである。「ピーンズ」もまた代表の藤村さんを中心とした楽しく充実した子育て期間を求めた主婦のセルフグループである。

さて、児童館には子どもから大人までの地域のニーズがどれだけ集まってきているだろうか。

地域にはシニアボランティアを始め特技や意欲をもった方々が、活動の場、参加の場を求めているはずである。子どものニーズに敏感であることは勿論大人のニーズに敏感になることは、児童館が地域から認知されることに繋がり、また児童館のボランティアとしての輪も拡がる。結果、子どもによりよいプログラムを還元することに繋がるのである。

ボランティア育成などという何やら堅苦しく難しそうだが、このように「自分発の活動」を児童館で支援し、実現していけばいいのである。これこそセルフヘルプを育てる活動なのである。母親の卓球クラブ、お年寄りのゲートボール、高校生のバンド活動、自主保育グループなどなど、それぞれの活動を支援しつつどこかでそれらの活動が子どもの生活の安定と、経験の拡大に還元されるよう工夫すればいい。児童厚生員は、それらをコーディネートして、皆が気持ちよく活動できるよう環境を整え、それらの活動が更に拡がるよう手伝えばよいのである。地域全体が児童館である。

この春「できることなら児童館を使ってどんなことをしたいか」を話す輪を、子どもから始めて地域の大人にまで拡げ、ニーズを探り、児童館活動のヒントを得てはいかがだろうか。その中から生まれてくる何気ない活動こそ、地域から求められている、ふくしの増進に貢献しているのである。そして、それは立派なボランティア育成に通じるのである。